「問題」経験とクレーム

——構築主義の社会問題研究によせて——

Experience of "Problems" and Claims-Making:

On the Constructionist Study of Social Problems

草柳千早

KUSAYANAGI Chihaya

This paper examines interactional processes through which personal difficulties or problems as experienced are defined and through which claims are made. First, I look into the constructionist idea of "claims." Then, the interaction between claimants is viewed as a reality-definition contest. I examine and develop the description of reality-definition contests formerly given by Loseke(1987). With an illustration of a case of claims-making regarding "fufu-bessei "(an argument against changing a married woman's surname to that of her husband), I discuss and show how one's experience and definitions of problems are involved and invalidated in the mechanism of reality-definition contests.

1. はじめに——構築主義とクレーム申し立ての研究

社会問題の経験的研究において、『社会問題の構築』(Spector & Kitsuse 1977)に始まる構築主義は、人々のクレーム申し立て活動に焦点を当てた。その基本にある発想は、社会問題は社会のメンバーによるクレーム申し立て活動を通じて構築される、というものだ。これに基づけば、社会問題研究は、何か固有の「問題」ある「社会状態」に関する客観主義的な研究ではなく、「ある状態が存在すると主張し、それが問題であると定義する人々による活動」(Spector & Kitsuse 1977: 訳117)に関する研究に向かうことになる。そこでは専門家が何らかの「状態」を「問題」であると診断し研究する営みもまた、「問題」が定義されていく社会過程の部分ということになる。

では、社会問題が人々のクレーム申し立て活動を通じて構築されるのだとすれば、人々は、いかにして自分たちの経験する様々な問題やトラブルを「問題」として定義し、クレームを申し立てているのだろうか。これがここでの問いである。

人々が「問題」を経験しクレームを申し立てていく過程——これを社会問題研究の射程に入れたのは、確かに構築主義であった。だが、この過程をめぐる考察は、いまだ展開の途上にあるように思われる。ひとつには、構築主義の方法に対する批判をめぐる論争が起こり、ここ数年議論のアジェンダがメタレベルに引き上げられてしまったという経緯がある。論争の詳細はすでに中河(1991, 1992)、ミラーとホルステイン(1993)等が紹介・検討を加えているので⁽¹⁾、ここでは簡単に述べれば、その引き金は、ウールガーとポーラ

大妻女子大学社会情報学部専任講師

ッチの批判(Woolgar & Pawluch 1985)である。彼らは、構築主義の議論には「社会状態」についての客観主義的説明という自ら批判していたはずの説明が混入していると告発したのである。すなわちそこには、「社会状態が変化したわけではないのに、人々の定義は変化した」といった説明が散見され、それらは、「社会状態は不変」という「状態」に関する客観主義的な説明であり、同時にまさしく一つの定義活動ではないかというのである。こうした告発は、構築主義の社会問題研究に固有の問題にとどまらず、社会現象に関する社会学的説明一般に敷衍され、論争は、結果的に構築主義的研究の関心をきわめてメタレベルへと追い立てることとなったのである。

この論争を経て、今一度構築主義の社会問題研究のありうべき方向を展望しようとするのが、論文集『構築主義再考』(Holstein & Miller 1993)であり、その柱となるイバラとキツセの「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素——社会問題研究のための相互行為論の立場からの一提案——」(Ibarra & Kitsuse 1993)であろう。だが、彼らの言う「新たな理論的展開の道筋を示すため」(Ibarra & Kitsuse 1993:30)の提案もまた、人々がいかにして「問題」を経験しクレームを申し立てるのかという過程を照らし出すものとは言いがたい。

イバラとキツセの提案とは、ひとことで言えば「社会問題ディスコースの理論」を発展させること、人々が社会問題を定義すべく用いる日常言語的な資源としてレトリックを研究していくことである。彼らは、「状態カテゴリー」(Ibarra & Kitsuse 1993:30)という用語を用いて、あくまで「状態」ではなく「状態についての人々の語り」についての研究を押し進めようとする。「状態カテゴリー」とは、社会的リアリティについて意味ある記述や評価を生み出すために人々が用いるカテゴリーを表す⁽²⁾。社会問題は、こうした状態カテゴリーを含む「イデオムの産物」とされ、そうしたイデオムを紡ぎ出す人々のコミュニケーション活動は「言語ゲーム」(Ibarra & Kitsuse 1993:32)として捉えられる。彼らは、社会問題のクレーム申し立てを、より厳格に言語的な次元で研究することを求め、またそのための概念装置の精緻化をめざしたのである。

こうして社会問題研究の焦点は、人々が「社会問題」を訴えるために用いる日常言語的な資源、クレームのレトリックとその応酬へと絞られていく。イバラとキツセは、レトリックを大きくイデオム、対抗レトリック、モチーフ、スタイルの4つの次元で研究することを提案し、さっそく見本演技を披露する。例えば、社会問題のレトリックのイデオムにはどのようなものがあるか。彼らは、喪失のレトリック、権利のレトリック、危機のレトリック、不合理のレトリックなどを列挙する。例えば、喪失のレトリックは、かけがえのない事物や特性が失われようとしているといった状態カテゴリーを含むレトリックであり、それを救うために何らかの手が打たなければならないといった道徳的な要請と結びつく。「野性動物を絶滅から救おう」などがその典型である。

このようなディスコース研究は確かに、「状態」ではなく「活動」を、という構築主義当初からの方法論的要請に沿った一つの回答ではある。しかしそうした研究は、社会問題をめぐる人々の活動過程をきわめて限定的にしか捉えないものになっているのではないと思われる。第一に、それは、クレームを経験的に接近可能な対象として取り扱うことによって、クレームを申し立てる人々の活動過程の研究というよりも、申し立てられたクレームの研究とでもいうべきものになっている。そこでは、「社会問題のクレーム」として

同定される言語的あるいは拡大してオーディオ・ヴィジュアルな対象が関心の焦点であり、クレームそれ自体が生み出されてくる過程は視野の背景に後退することになる。さらに、このような研究は、後で考察するように、何が「社会問題のクレーム」なのか、またそれを同定するのは誰なのかという、それ自体人々によって争われうる問いに対して、予め答えを持ち込むという困難を招き寄せることになる⁽³⁾。

では一体、人々が日常生活のある局面を「問題」として経験しクレームを申し立てていくとする過程とは、どのようにして捉えられるのだろうか。この問いにこたえるために、ここでは一つの仮説的な枠組みを提示する。それは、社会問題をめぐる人々の相互行為過程を、リアリティ定義の競合として捉え直す試みである。リアリティ定義の競合とは、ローセク(1987)によって相互行為過程の記述に用いられた概念である。ここでは、構築主義当初の「クレーム」概念に今一度戻りながら、ローセクの議論を一つの手掛かりに、問題をめぐる人々の応酬をリアリティ定義の競合として捉え直していく。それによって、「問題」を経験しクレームを申し立てるという実践自体が、相互行為過程におけるきわめて微妙で不確かな構築物として成立するものであることを示していく。またそこから、このような人々の「問題」をめぐる営みが巻き込まれていく相互行為と相互経験の過程を、構築主義的な社会問題研究の射程に入れていくべき固有の領域として照らし出していきたい。

2. リアリティ定義としてのクレーム申し立て

まず、構築主義が概念化したクレーム申し立てとは、どのような実践だったのか。一旦「クレーム」概念に立ち戻り、それが、リアリティ定義の提起として捉えられることを述べ、リアリティ定義の競合という枠組みへの接続を準備する。

スペクターとキツセによれば、クレーム申し立て活動とは、「ある状態が存在すると主張し、それが問題であると定義する人びとによる活動」(Spector & Kitsuse 1977: 訳117)である。しかも「クレーム」とは、常識の一部、「社会的に構成されたカテゴリー」である(Spector & Kitsuse 1977: 訳124, 125)。何がクレームか否かは、社会のメンバーによって決定されるのであり、専門家がそうした人々の営みと独立に定義するのではない。クレームとは、申し立てる者と受け取る者との相互行為過程の内にあり、申し立てる者に定位すれば「問題」経験に基づいて対他的に「問題」を定義し表明するもの、一方、社会のメンバーによって日常的に構成されるものののだ。

ここには、クレームが、二重の定義を通して具現化することが含意されていると言える。第一に、まずクレームを申し立てようとする者が、ある「状態」を「問題」として定義するという。第二に、そのような定義活動を、当人も含めて人々が「クレーム」として定義するという。この二つの手続きは必ずしも連結しているわけではない。つまりある者がある「状態」を「問題」として定義し、それを人々が「クレーム」として受けとる場合がすべてではない。「ある状態」を「問題」として定義し表明しても、「クレーム」として捉えられない、逆に「問題」を何も定義していないにもかかわらず「クレーム」を申し立てているとされる場合も考えられる⁽⁴⁾。

「問題」をめぐるクレームの応酬と呼ばれるものは、この二重の定義に関わる応酬なのである。第一の定義、すなわち、ある状態が存在すると主張しそれを問題であると定義す

る、このような定義は、言わば「状態」をいかなるものとして経験しているのかの表明である⁽⁵⁾。そしてこのような定義活動が意味を持つのは、われわれが“同じ”日常生活世界に生きており、なおかつ「ここで起こっているのは何か」の経験(Goffman 1974:8)は多様でありうるという前提に立っているからである。人々は“同じ”事態を経験しうが、その“同じ”事態が人によって「問題」として感じられたり感じられなかったりするという可能性の想定——そこに、「問題」を定義し表明していく営みが意味あるものとしてなされる素地がある。もし皆が“同じ”ことを同じように「問題」として経験するなら、そもそも「問題」を定義し表明する必要はなく、逆に“同じ”ことを経験できないなら、「問題」を訴えても無駄である。例えば、“同じ”結婚改姓が、ある人々には幸せとして経験され、別の人々には不便や苦痛を強いる「問題」として経験される。この“同じ”事柄をめぐる問題経験のズレが、夫婦別姓というよく知られたクレーム申し立て活動を生み出しました成り立たせているのである。

こうして、ある「状態」を「問題」として定義する活動は、“同じ”事態を「問題」として経験していない人々のリアリティ定義に対して、オルタナティブなリアリティ定義を提起することと言える。クレームを申し立てる者は、他の人々に対して、彼らが「問題」にしていないある「状態」が「問題」として経験される／されうことを示すのだ。それは、人々が保持してきたリアリティ定義——「ここには問題はない」などと意識されることさえない——に挑戦し、別のリアリティ定義——「ここに問題がある」——を対置することである。

もちろん、異なるリアリティ定義がいつも対置・対決の関係にあるわけではない。それどころか、われわれの日常生活は、様々な異なるリアリティ定義が折り重なり合う世界である。だが、クレームを申し立てる者は、「問題」の解決、改善を期待しており、そのために自分の経験している「問題」が他の人々にも「問題」として受け入れられることを期待する。つまり人は、自分のリアリティ定義が、他の人々の保持してきた定義を凌駕することを期待するのである。それに対して他の人々が彼ら自身の定義を保守しようとするとき、「問題」の有無、また何が「問題」なのかをめぐる異なる定義が競合することになる。これが「リアリティ定義の競合」(reality-definition contests)である。こうして、クレームとカウンタークレームの応酬、問題を経験している者と経験していない者との応酬は、「リアリティ定義の競合」過程として捉えられるのである。

加えてさらに、先に挙げたもう一つの定義が、「問題」をめぐる応酬には関わっている。すなわち、第一の定義活動を「クレーム」として定義する営みである。実のところ、ある「状態」の「問題」についての定義の競合であるだけならば、「問題」をめぐる応酬は、イバラとキツセのいう「状態カテゴリー」という概念で充分捉えられるとも言える。すなわち、「問題」をめぐる応酬とは、異なる状態カテゴリーの競合であると。しかしながら、この応酬にはもう一つの定義、「問題」を定義し表明する活動を「クレーム」の申し立てであると定義する営みが関わっている。

「クレーム」という定義は、「問題」を定義し表明する側と受け取る側双方が行う、「いまここで起こっているのは何か」についての定義である。それは単に受け手が「問題」表明者の語りについて行う判断ではない。そこには、「問題」の定義と表明がなされている今この場の状況、申し立てを行う人々と受け手の人々の相互行為、双方それぞれの

アイデンティティと相互関係、ふるまいやその流儀、言及されている「状態」についての互いの経験・知識等々を含むきわめて広範囲で、言わばとりとめのない状況全体についての経験が関わっている。スペクターらの挙げる例を引けば、郵便局の運営のずさんさを訴える熱心なスピーチも、大学の東洋宗教の講義中、それまで黙って聴講していた学生によって突然始められたなら、「クレイム」どころか「変人の奇行」として定義されてしまう(Spector & Kitsuse 1977: 訳126)。こうした定義は明らかに、学生の話の内容そのものについての定義ではなく、状況全体のリアリティについての定義の部分として生み出されるものである⁽⁶⁾。

クレイムの応酬、「問題」をめぐるやりとりには、社会的カテゴリーとしてのクレイムの性格上、二重の定義が関わっている。それらの定義は、「問題」として言及される「状態」がどのようなリアリティとして経験されるのか、加えて、そうした「問題」経験の表明をめぐる今ここで起こっていることがどのようなリアリティとして経験されるのか、を含むきわめて全体的なリアリティ定義である。「問題」をめぐるやりとりは、「問題」として言及されているある「状態」についての定義の競合——「状態カテゴリー」の競合——をはるかに超えた、リアリティ定義の競合なのである。

このようなリアリティ定義の競合という枠組みにおいて見れば、構築主義が主題化しようとしてきた、いわゆる「クレイム」の応酬は、リアリティ定義の競合の一形態ということになる。またこの視点から見れば、イバラとキツセが提案するクレイムのレトリックの研究は、「クレイム」として既に定義された言語的な対象に注目し、それが「問題」をいかに定義するものであるかを問うという、限定的な研究であると言えるだろう。

3. 「問題」をめぐるリアリティ定義の競合

こうして、「問題」をめぐる人々の応酬は、リアリティ定義の競合として捉えることができる。では、リアリティ定義の競合とは、どのような過程であり、クレイムを申し立てようとする人々はこの過程にどのように巻き込まれていくのか。ここでは、ローセクの議論(Loseke 1987, 1989, Loseke & Cahill 1984)を参考にし、次いでこれに検討を加えていく形で、リアリティ定義の競合過程を描いていく。ローセクは、夫に虐待された妻たちと保護施設のワーカーとのやりとりにリアリティ定義の競合を見出した。

(1) リアリティ定義の競合過程——ローセクのケーススタディ

ローセクは、妻の虐待という社会問題のケーススタディを通じて、二つのリアリティが競合する様を考察した。その二つとは、「『妻の虐待』とは何か」について、専門家の定義する公式リアリティ(the official reality)と、妻の生きられたリアリティ(lived realities)ないし主観的リアリティ(the subjective realities)である。妻の虐待という問題自体、かつて単なる私的トラブルとされていたものが、クレイム申し立て活動によって社会問題として取り組まれるようになったという経緯があるのだが、ここで扱われるのは、この経緯から生まれた専門家と妻の間のリアリティ定義の競合である。

「妻の虐待」とは何か、専門家の公式定義ではそれは、夫による①激しく、②繰り返さ

れ、③身体に傷痕を残す、④心理的に傷痕を残す、⑤意図的な、身体的暴力であり、この定義は、妻を保護する施設でワーカーによって各ケースに適用される(Loseke 1987:231-232)。つまり個別のケースが「妻の虐待」であるかどうか、妻を保護すべきかどうかの判断は、妻の主観的リアリティに依拠して語られるストーリーが公式定義にどれだけ当てはまっているかに基づいてなされる。妻の生きられたリアリティは、専門家の公式のリアリティ定義を通じて、再定義され、分類され、対処されるというのである。

ローセクは、このようなワーカーと妻の間に二つの形でリアリティ定義の競合が生じているという(Loseke 1987:236)。一つは個人のパーソナルアイデンティティをめぐる競合。一方の定義が、他方のアイデンティティを規定するのである。妻とワーカーの場合、妻の、虐待された妻という自認がワーカーの観点から否定されたり、逆に自認のない者が、虐待された妻、しかも正しい自己認識のない者として保護されるということが起こる。

第二に、直接経験の意味をめぐる競合。一方の定義が他方がどのような状況にあり何を経験しているかを規定する。妻とワーカーの場合、妻の経験が、ワーカーによって再解釈されたり無視されるということが起こっているというのである(Loseke 1987:237)。夫婦の間で何が起きているのか、妻よりもワーカーの方が心得ているとされるのである。

これが、“同じ”「妻の虐待」という事態をめぐるリアリティ定義の競合である。競合は、参加者のアイデンティティおよび直接経験の意味をめぐる展開し、一方の定義が他方を凌駕する。そして、この競合に凌駕される形で巻き込まれた者は、自分のアイデンティティおよび直接経験の意味に対するコントロールを失っていく、というわけである。しかも、アイデンティティと直接経験の意味とは、ローセク自身も後に言及するように、われわれの経験の中で密接に関係づけられている⁽⁷⁾。例えば、「お前はいい子だ」という属性付与は、それに相応しい経験以外の経験をしてはいけない、するはずがない、という命令である(Laing 1961-1969:135)ように。一方を規定されることは、他方を規定されることなのである。

ここには、問題経験に依拠して何が問題なのかを定義しクレイムを申し立てるという人々の実践が、それ自体相互行為においてきわめて微妙な形で成立しうるものであることが示唆されている。「問題」をめぐるやりとりをリアリティ定義の競合として見るならば、一方の人々が自分たちの問題経験を「社会問題」として定義していく過程は、同時に“同じ”事態を「問題」として経験していない他方の人々によって彼らや彼らの活動が定義されていく過程でもあるものとして浮かび上がってくる。クレイムを申し立てるという実践は、「問題を感じる」という経験に裏打ちされ、そうした経験をしている自己への確信に支えられている⁽⁸⁾。だが人は、「問題」を経験しても、それを経験していない他者のリアリティ定義に晒され、その観点からアイデンティティと直接経験の意味をより強力に定義され、訴えそれ自体を無効化されてしまう、ということが示されたのである。

(2) リアリティ定義の競合のメカニズム

ローセクのケーススタディから、リアリティ定義の競合という図式の概略は得られた。では、このような競合において一方のリアリティ定義が他方を凌駕するというのはどのようなメカニズムにおいてなのか。

先に述べたように、日常生活は、様々な異なるリアリティ定義が折り重なり合う世界である。そのような世界で、「問題」を経験する者は、その解決を求めて「問題」を定義し表明しようとする。それに対して受け手側の人々は、この定義を受け入れて自分たちのリアリティ定義を変容させるか、あるいは逆に自分たちのリアリティ定義によってこの定義を再定義しようとする。このようなリアリティ定義の競合において、自分の定義によって他者の定義を凌駕し排除してこうする営みを作動させるのは、他者のリアリティ経験を不適切なもの、無効なものと思なす認定である。自らの定義をより適切なもの、正当なもの、それに対して他方を不適切なもの、誤りであり是正すべきものとする、この認定が、リアリティ定義の競合を作動させ、またその競合への参加に根拠を与えるのである。だが、この認定もまたリアリティ定義の一部なのである。

ローセクのケーススタディでは、二つのリアリティ定義の一方が公式的で客観的なもの、他方が主観的なものとされ、後者が前者によって再定義されていく様を描かれた。だが、ここで重要なのは、あるリアリティ定義が客観的であり、別の定義が主観的であるといった認定、また専門家の客観的な定義が素人の主観的な定義よりも確かであるという認定自体、人々の定義によるものということだ。

ポルナーは、世界について相矛盾した複数の経験があることを、レインの議論(Laing 1965:35-36, 1967)を参照しつつ「リアリティ分離」(reality disjunctures)(Pollner 1987:69)と呼び⁽⁹⁾、リアリティ分離に臨む人々が、競合する経験の中からどれが正しくどれが誤っているかを決定することに含まれる問題性を論じている。人は、競合する経験の中からどれか一つを世界の決定的経験として選択する。例えば、私が見ているペンを、見えないと主張する者がいれば、私は彼が見落としていると考える(Pollner 1987:74)。このとき私は、自分自身の直接経験を世界についての決定的経験として選択し、相手の経験を誤りや不完全なものと思なしている。私が幻覚を見ているといった可能性は考えない。では、この選択の正しさはいかにして保証されるのか。「ペンは現にあるのだから」という正当化は、単に自分の直接経験の選択を反復しているに過ぎない。だが、このトートロジーにおいて人は、自分の経験を「以後の推論の頑強な基盤」(Pollner 1987:75)とし、競合する経験を失墜させる。

今一度先のケーススタディに戻れば、専門家の客観的なリアリティ定義と、妻の主観的なリアリティ定義が競合しているというローセクの捉え方は、もはや充分ではなくなる。一方のリアリティ定義は、専門家の客観的なものと見なされ、それとの対比で、他方は主観的で当てにならないものと見なされているのだ。言わばリアリティ定義の定義というメタレベルに、競合するリアリティ定義のうち一方を信任する選択がすでに組み込まれているのである。その定義の正当性は、すでに選択されたリアリティ定義の観点から見て他のリアリティ定義は適切ではないというトートロジカルな選択の反復によって、支えられているのである。このようなことはごくありふれている。例えば「専門家」が、「本当の恋愛」について講釈し、ある種の人々の「恋愛」経験を「本物の恋愛」ではないと断定するなど。リアリティ定義の競合は、リアリティ定義の定義というレベルで、自分のリアリティ定義を「客観的」「正当」「広い視野に立っている」などと定義し、その定義に基づいて、競合する定義を「主観的」「誤り」「視野が狭い」「現実が見えていない」などと定義し失墜させる、このようにして勝ち取られるのである⁽¹⁰⁾。

このようなリアリティ定義の競合において、ある人の「問題」経験と定義は、いったいどのような運命を辿りうるのだろうか。ある人の「問題」経験と定義の試みは、“同じ”日常生活において「問題」を経験していない他者たちに経験され、他者たちのリアリティ定義に晒される。彼の「問題」を定義しようとする試みや彼自身のアイデンティティは、他者たちの観点から定義され言及され無効化されうる。そしてこれに対抗して自らの「問題」経験とアイデンティティとを肯定しようとする営みもまた、リアリティ定義の競合の内に巻き込まれており、すでに採用されている定義の観点から却下されうるのである。

このようなリアリティ定義の競合は「社会問題」をめぐって起こりうるきわめてありふれたものであると思われる。近年活発化している夫婦別姓問題を例に見ておきたい。

4. 夫婦別姓問題にみるリアリティ定義の競合

夫婦別姓問題とは、現代日本の夫婦同姓制度に対するクレーム申し立て活動を通じて提起されてきた。言うまでもなく、現代日本では夫婦同姓は民法第750条で規定されており、實際上、何か特別な事情でもない限り女性側が改姓するのが普通であるとの通念のもと、女性の結婚改姓が一般的に行われている。この状況全体を、夫婦別姓を求める人々（以下別姓主張者）は「問題」として定義する。そのパブリシティにおけるクレームによれば、夫婦同姓は、多くの場合女性に結婚改姓を余儀なくし、望まない改姓を強いられた者に自己喪失感、配偶者との間の不平等感、信用・実績の断絶など様々な不都合不利益を与えている。このような状況を存続させている現行民法第750条は、憲法に定められたすべての国民の平等、表現の自由、結婚の自由、氏名権、また女性差別撤廃条約などに照らして不適切であり、直ちに改正し夫婦別姓選択制を導入すべき、というものである⁽¹¹⁾。言わば、不平等のレトリック、権利のレトリックなどが用いられたクレームである。しかしここで目を向けたいのは、パブリシティにおけるクレーム・レトリックではなく、人々によって姓をめぐる「問題」が経験され語られてきた日常生活の現場である。

日常生活で、夫婦同姓・結婚改姓に問題を感じる者は、周囲の人々に、その不満や苦痛、違和感などをしばしば表明する。そしてそれは、夫婦同姓・結婚改姓を当たり前とする人々に様々な反応を喚起する。夫婦別姓運動団体の一つ「夫婦別姓選択制をすすめる会」が夫婦別姓問題に関心を持つ人々を対象に行った「夫婦別姓に関する調査」(1993)⁽¹²⁾によれば、対象者の多くが、日常、夫婦別姓を話題にした場合、家族や友人、職場などの周囲の人々から自分自身や家族について言及される(48.2%)、または、言及される可能性がある(27.1%)としている。ではどんなことを言われるのか。自由記述から採取された言葉は、多い順に「わがまま」(156)(()内件数)、「子どもがかわいそう」(106)、「現実離れしている」(95)、「ご主人がかわいそう」(87)、「変わっている」(78)、「なぜこだわるのか」(67)、「理解できない」(54)、「名前を変えるのは当たり前」(47)、「規則は守れ」(38)、「嫁の自覚がない」(32)、「世間体が悪い」(26)などと続く。

これらの反応は、端的に別姓主張者その人のあり方、またその「問題」経験それ自体を「問題」とするものである。別姓主張者は、「わがまま」という妻／母／大人の女性ならば道徳的に正すべきとされているような性格カテゴリーを付与され、「子ども」や「ご主人」への愛情や配慮の欠如を咎められる。また「現実離れしている」との言及における

「現実」とは、まさに夫婦同姓を当たり前とする人々のリアリティであり、別姓主張者の依って立っている「現実」はそこから「離れている」ことが「問題」とされるのだ⁽¹³⁾。

何が「問題」なのか、何が起きているのかをめぐって、ここには、別姓主張者の定義とは競合するリアリティ定義が提示されている。周囲の人々にとっては、別姓主張者が経験していると主張する「問題」は「問題」ではない。むしろ、皆にとって当たり前であることを受け入れない別姓主張者の方にこそ「問題」があるのだ。そしてそのような者の主張は、正当な「クレーム」などではなく、「夫、子どもへの愛情・配慮の欠如」の証左、「現実離れ」している者の「わがまま」というわけである。

人は自らの「問題」経験に基づいてクレームを申し立てようとする。だが、他者たちのリアリティ定義に晒され、その観点からアイデンティティ、経験、それに基づく行為を定義され言及される。「問題」を経験している者の「問題」経験は、それによってしばしば本人に帰すべき「問題」に還元されるのである。そしてこのような他者たちの定義に対抗して、あくまでもうひとつのリアリティである自分の「問題」経験にこだわり続けようとするならば、すでに採用されている他者たちの定義の観点から、その者の「問題」性はますます深まってしまう。こうして人は、自らの「問題」経験に立脚することさえも無効化されてしまうのだ。クレームはクレームとして申し立てられる以前に挫折してしまうのである。このようなプロセスは、「クレーム」として同定される言語のレベルで「社会問題」に接近している限り、その射程に入っていない。

5. おわりに

本稿は、人々が「問題」を経験し定義していく過程に注目し、クレーム申し立てを一つのリアリティ定義の提起として捉え、「問題」をめぐる人々のやりとりを、リアリティ定義の競合として考察することを試みてきた。そしてその作業を通じて、「問題」を経験し表明しようとする者が、巻き込まれ、自分自身とその経験を賭けることになってしまう相互行為過程のメカニズムを見出した。

自分の感じる「問題」を訴え、解決していこうとする実践は、まさにその「問題」経験の切実さに裏打ちされ、そこからエネルギーを得ている。しかしながら、相互行為過程において、「問題」を経験しているという個々人のリアリティ経験とその表明は、「問題」を経験していない人々の堅固なリアリティ定義と競合し、そのような競合に巻き込まれるとき、きわめて脆弱なものとして露顕する。

「問題」をめぐるやりとりは、リアリティ定義の競合として見るとき、問題経験に基づいて日常生活の局面を問題化しようとする人々の活動の過程であると同時に、そのような問題化を阻むメカニズムとして浮かび上がってくる。われわれの問題経験とその表明は、われわれ自身のアイデンティティもろとも、競合するリアリティ定義の中で逆に「問題」化され、われわれの定義は「社会問題」を必ずしも構築しえない。

こうして、社会的に可視化されたクレーム申し立て活動の過程という層の下に、問題を経験し定義しようとする営みそれ自体が巻き込まれ、そこで挫折しうる日常的な相互行為の過程が照らし出される。その過程は、人々が感じている「問題」がクレームを通じて社会的に可視化されていく現場であるだけでなく、逆に、個々人の問題経験をクレームへ、

また社会問題へと可視化させない現場でもあるものとして、さらに接近されるべき固有の「問題」領域なのである。

【註】

- (1)構築主義の理論的展開及び論争の過程については中河(1990/1991, 1992)が参考になる。
- (2)それは「想定された状態」というスペクターとキツセの当初の用語、すなわち客観的状态に言及しているとの批判を結果的に招くこととなった用語に代わって採用される。
- (3)またこのような対象として同定される「クレイム」は、往々にしてパブリシティに見出されやすいため、その研究は、「パブリシティ」(Gubrium 1993:92)あるいは「ラージスケール」の意識的に操られたレトリック(Holstein & Miller 1993a:152, 1993b:246)の研究であって、人々の日常的な営みを捉えるものではないといった、対象の在り処とスケールをめぐる批判や懸念をも招くことになっている。グブリウム、ホルステインらは、「より小さなスケールで社会問題を構成する、無数の日常的な相互行為」(Holstein & Miller 1993:152)、「小さな世界の文化」(Gubrium 1993:89)にもっと目を向けるべきと論じる。またミラーはその関心から、会話実践を焦点とする「社会問題ワーク」の研究を掲げる(Miller & Holstein 1989, Miller & Holstein 1993a)。ミクロな相互行為次元への視点のシフトを提起するものには他に、Marlaire & Maynard(1993)、中河(1992)等。
- (4)例えば江原は、ウーマンリブ運動のクレイム申し立て活動がマスコミによりことごとく「からかい」や「嘲笑」の対象とされていった事態を指摘し分析する(江原 1985)。
- (5)ただし、「問題」の経験自体、エマソンらが指摘するように多くの場合「『何かおかしい』という漠然とした感じ」(Emerson & Messinger 1977:121)に始まるものである。
- (6)スペクターとキツセは、クレイムが社会的カテゴリーであることを論じた。だがその関心を社会問題の自然史モデルへと向けることで、この論点の含意を十分に展開させていないように思われる。
- (7)後にローセクは、これらの関係に焦点を当て、クレイムにおいて「状態」「人々」「道徳」「感情」が一体となって構築されることを論じている(Loseke 1993)。
- (8)スミスは、女性が「問題」を感じる「私」の方がおかしいと思わされてきたことを、「経験の断絶」として分析する(Smith 1979)。
- (9)ポルナーは彼自身、構築主義論争に、リフレキシビティ問題をめぐって参加している(Pollner 1993)。
- (10)リアリティ定義権の偏在と経験者資格の序列化の問題として論じるものに草柳(1992)。
- (11)詳しくは、東京弁護士会・女性の権利に関する委員会(1990)、法務省民事局参事官室(1992)等を参照のこと。また夫婦別姓のクレイムについての議論は、草柳(1993)。
- (12)夫婦別姓選択制をすすめる会が1993年5～7月に、同会会員、関連団体会員等を対象に実施。有効回収数 743票(回収率 74.3%)。以下のデータについては草柳(1994)。
- (13)夫婦別姓への同様の反応はマスメディアにおいても散見される。「女のただのわがままでしょ」「夫婦別姓は、フェミニズム運動にかぶれた女性たちの意見。常識的な夫婦問

題をわかっていないとしか思えません」(共に週刊朝日1991.3.1.)、「子どもがかわいそう」(婦人公論1991.4.)、「潔くない。それとも、結婚したことを隠しておきたい下心でもあるのかと勘繰りたくなるし、こんな未練を捨てきれない女を女房にした亭主が気の毒でならない」(週刊読売1988.12.18)等々。

【参考文献】

- 足立重和・工藤宏司・平英美・馬込武志, 1993, 「構築主義の可能性——Comments on Nakagawa——」『大阪教育大学紀要』第Ⅱ部門第42巻第1号, pp.15-40.
- 鮎川潤, 1991, 「社会問題研究における構築主義パースペクティブ——エスノメソドロジカル批判を手がかりに」『金城学院大学論集』(社会科学編)第34号, pp.43-73.
- 江原由美子, 1985, 「からかいの政治学」『女性解放という思想』勁草書房, pp.172-194.
- Emerson, R. M., & S. L. Messinger, 1977, "The Micro-Politics of Trouble," Social Problems, 25, pp.121-134.
- Goffman, E., 1974, Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience, Northern University Press.
- Gubrium, J. F., 1993, "For a Cautious Naturalism," in J. A. Holstein & G. Miller (eds.), RSC, pp.89-101.
- Holstein, J. A., & G. Miller, 1993a, "Social Constructionism and Social Problems Work," in J. A. Holstein & G. Miller (eds.), RSC, pp.151-172.
- 1993b, "Reconstructing the Constructionist Program," in J. A. Holstein & G. Miller (eds.), RSC, pp.241-250.
- 1993, (eds.)Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory, Aldine de Gruyter, NY. →[RSC]
- 法務省民事局参事官室, 1992, 「婚姻及び離婚制度の見直し審議に関する中間報告」
- Ibarra, P. R., & J. I. Kitsuse, 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems," in J. A. Holstein & G. Miller (eds.), RSC, pp.25-58.
- 草柳千早, 1992, 「リアリティ経験と自己—他者関係——ゴフマン—レインの『経験の政治学』への視角——」『関東学院大学文学部1991年度紀要』第64号, pp.103-120.
- 1993, 「『問題』経験の政治学」山岸健編著『日常的世界と人間——社会学の視点とアプローチ』小林出版, pp.299-317.
- 1994, 「夫婦別姓が提起する問題」『季刊女子教育もんだい』58号, 労働教育センター, pp.16-22.
- Laing, R. D., 1960-1965, The Divided Self: An Existential Study in Sanity and Madness, Penguin Books.
- 1961-1969, Self and Others, Tavistock Publications, London.
- 1967, The Politics of Experience, Pantheon Books, NY.
- Laing, R. D., H. Phillipson & A. R. Lee, 1966, Interpersonal Perception: A Theory and a Method of Research, Tavistock Publications, London.
- Loseke, D. R., 1987, "Lived Realities and the Construction of Social Problems: The Case of Wife Abuse," Symbolic Interaction, Vol.10, No.2, pp.229-243.
- 1989, "Creating Clients: Social Problems Work in a Shelter for Battered Women," in J. A. Holstein & G. Miller(eds.), Perspectives on Social Problems, Vol.1, Greenwich, CT., pp.173-193.

- 1993, "Constructing Conditions, People, Morality, and Emotion: Expanding the Agenda of Constructionism," in G. Miller & J.A. Holstein(eds.), Constructionist Controversies: Issues in Social Problems Theory, Aldine de Gruyter, NY, pp.207-216.
- Loseke, D. R., & S. E. Cahill, 1984, "The Social Construction of Deviance: Experts on Battered Women," Social Problems, Vol.31, No.3, pp.296-309.
- Marlaire, C. L., & D. W. Maynard, 1993, "Social Problems and the Organization of Talk and Interaction," in J. A. Holstein & G. Miller (eds.), RSC, pp.173-199.
- Miller, G., & J. A. Holstein, 1989, "On the Sociology of Social Problems," in J. A. Holstein & G. Miller(eds.), Perspectives on Social Problems, Vol.1, Greenwich, CT., pp.1-16.
- 1993, "Reconsidering Social Constructionism," in J. A. Holstein & G. Miller (eds.), RSC, pp.5-23.
- 中河伸俊, 1990/1991, 「クレイム申し立ての社会学——構築主義の社会問題論の構成と展開(上)(下)」『富山大学教養学部紀要(人文・社会科学篇)』22巻2号, pp.57-73/23巻2号, pp.49-79.
- 1992, 「社会問題ゲームと研究者のゲーム——『社会問題』と『逸脱』へのコンストラクショニスト・アプローチの諸課題」『富山大学教養学部紀要(人文・社会科学篇)』25巻2号, pp.57-81.
- 1993, 「『脅かされる』子どもたち——『有害』コミック問題の構築」, 中河伸俊・永井良和編著『子どもというレトリック—無垢の誘惑』青弓社, pp.75-119.
- Pollner, M., 1987, Mundane Reason: Reality in Everyday and Sociological Discourse, Cambridge University Press.
- 1993, "The Reflexivity of Constructionism and Construction of Reflexivity," in J. A. Holstein & G. Miller (eds.), RSC, pp.199-212.
- Smith, D. E., 1979, "A Sociology for Women", in Sherman & Beck(eds.), The Prism of sex: Essays in the Sociology of Knowledge, Madison: University of Wisconsin Press. [「女性のための社会学」シャーマン&ベック編 田中和子編訳『性のプリズム』勁草書房 1987, pp.180-270].
- Spector, M., & J. I. Kitsuse, 1977, Constructing Social Problems, Menlo Park, CA:Cummings. [村上直之、中河伸俊、鮎川潤、森俊太訳『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』マルジュ社, 1990] .
- 東京弁護士会・女性の権利に関する委員会編, 1990, 『これからの選択—夫婦別姓—く個と姓の尊重>女と男の自由な関係』日本評論社.
- Woolgar, S., & D. Pawluch, 1985, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problem Explanations," Social Problems, Vol.32, No.3, pp.214-227.